

【論説】

もうひとつのアジア

——竹内好の朝鮮像——

Another Asia: Yoshimi Takeuchi's image of Korea

水谷 仁*

MIZUTANI Hitoshi

Abstract

Presents paper focuses into Yoshimi Takeuchi's unique perception of Korea as a specific actor in Asia. Takeuchi was a Chinese literature researcher and thinker who approached Asia and its regions in his own individual way. Understood by almost all of studies on Takeuchi, his image of Asia is connected with China. However his image of Asia also includes Korea. In present research, I specifically inquire into Takeuchi's personal understanding of Korea.

His image of Asia was recognized under the scheme "invasion-resistance as opposed concept". Takeuchi recognized that relation between Europe and Asia is less geographical and essential, but more correlative. It would mean that Europe could only be viewed as Asia's invader. On the other hand, Asia is just able to exist as the resistant against Europe's invading. This image of Asia as resisting actor was generalized in his understanding from works of Chinese novelist Lu Xun. Also Takeuchi's perception of Asia was understood as actor indivisible from China.

However, a part from that, he had another unique view on Asia that was drawn from the perspective on Korea. In his exploring works on Asia, Takeuchi basically expressed solidarity to other Asian nations, which were subjected to Japanese aggression. Based on this awareness, he constructed his main idea on Korea.

According to Takeuchi's image, Korea was being, which was forcibly subjected to Japanese role. In particular, Korea was caught between two main problems. First, strict Japanese rule based on military occupation. Second, Japanese language, which got the status of *Lingua Francas*. Thus, Korea was placed in an ambiguous condition. Therefore, there appeared a big gap between Japanese and Koreans, in terms of understanding each other's problems and views on them. Takeuchi described Korea as existence suffering from Japanese dominating. Additionally, he demanded self-reflection to Japanese with his image of Korea.

*愛知県立大学非常勤講師

目次

序

I. 抵抗の主体としてのアジアと〈アジア＝朝鮮〉

1. 竹内における「アジア」
2. 抵抗の主体としての〈アジア＝中国〉
3. 朝鮮への視座

II. 朝鮮像を生み出す竹内の方法と問題意識

1. 梶村と中野の竹内批判
2. 竹内なりの朝鮮像の理由——抵抗という方法

III. 朝鮮をめぐるジレンマ

1. 被支配者としての朝鮮
2. 被支配者としての朝鮮のジレンマ

結

序

本稿では、竹内好におけるもうひとつのアジアとしての朝鮮像を論じる。竹内好（1910-1977年）は、アジアと真摯に向き合い、アジアと日本を真剣に考えた戦後日本の思想家・知識人であった。近年においても、その存在を無視して日本とアジアの関係を考えることはできないほど、彼の重要性は消えていない¹。そのような議論状況において、竹内がどのようにアジアを捉えていたのかという問題を論じることは、アジア研究の一環としても、そして竹内研究の一環としても、有益なものになるはずである。

これまでの研究においては、竹内にとってのアジアは中国と重ね合わされたものであると理解されてきた²。竹内が魯迅を中心とする中国文学研究者であり³、さらには、中国を対象とし、論じ、考えることが、自己を見つめ直すことと不可分に結びつけられてもいたために⁴、既存の研究において、竹内のアジア認識はいわば〈アジア＝中国〉だと見做されているといえる。

ただし、竹内がアジアを論じるとき、中国だけでなく、朝鮮もその対象とされている⁵。

¹ 日本とアジアの関係という文脈で竹内を論じている近年のものとしては、中島（2014）、梶谷（2015）、萩原（2015）などを参照。また、竹内研究の最新のものとしては、田澤（2015）がある。

² 竹内のアジア認識についての近年の主要な先行研究としては、松本健一（2005）、丸川（2010）、杉谷（2011）、萩原（2015）を参照。また、1980年代以降の竹内研究を概観するものとして、佐藤（2006）を参照。

³ Seifert und Uhl（2005）、Nachwort der Herausgeber, 299.

⁴ 先行研究においてこのような指摘は枚挙に暇はないが、比較的近年のものとして陳（2011）がある。

⁵ 朝鮮についての竹内の主な言及は、以下の論稿にみられる。竹内好「鮮満旅行記〔一九三二年（昭和七年）〕」（1932）集⑧、3-10頁、「東洋人の日本観」（1955）『日本とアジア』、73-82頁、「金達寿著『朝鮮』」（1958）集⑤、232-235頁、「方法としてのアジア」（1961）『日本とアジア』、442-470頁、「日韓交渉私感」（1962）集⑨、353-355頁、「日本人のアジア観」（1964）『日本とアジア』、92-111頁、「朝鮮語のすすめ」（1970）集⑤、235-238頁、「朝鮮映画「赤い花」を見て」（1970）

もっとも、朝鮮について竹内が叙述したものはそれほど多くなく⁶、自分を含めた日本人が
いかに朝鮮のことを知らないのかを説いてもいるため⁷、竹内における朝鮮という問題が論
じられることは、これまでほとんどなかった⁸。

しかしながら、「私など中国のことを勉強していると、中国を知るためには朝鮮を知らな
ければならぬと痛切に思うことがある⁹」、「私は余力があれば今からでも朝鮮語を習いたい。
そして人にもすすめたい。〔…〕あなたがあなた自身になるために、朝鮮語がどんなに役
立つかを力説したい¹⁰」というように、竹内は、朝鮮を知り、学ぶことの必要性を説いてい
た。では、なぜ竹内は、朝鮮を知り、学ぶ必要があると説かなければならなかったのか。
そして、竹内はどのように朝鮮を語ったのか。朝鮮を語ることにどのような意味が込めら
れていたのか。〈アジア＝中国〉だけにとどまらず、なぜ竹内は〈アジア＝朝鮮〉にまで自
身の考察の射程を広げていたのか。さらに、こういった問いの前提として、竹内の〈アジ
ア＝朝鮮〉というアジア認識や朝鮮像とは、いったいどのようなものだったのか。朝鮮を
俎上に載せることで、竹内は何を問おうとしたのか。これらの問題を、本研究で考察して
いきたい¹¹。

集⑤、238-242 頁、「隣人の責務」(1973) 集⑤、242-243 頁、「時勢の要求を満たすもの——『現代韓国文学選集』につ
いて」(1973) 集⑤、243-244 頁、「アジアの中の日本」(1974) 集⑤5、168-181 頁、「おもかげの消えぬ人」(1974) 集⑤、
245-247 頁など。

なお、竹内からの引用は基本的に『竹内好全集』から行うが、『日本とアジア』に収録されているものに限っては、こ
ちらから引用することとする。

⁶ 菅孝行は、朝鮮に対する竹内の言及がほとんどなかったことが、「一貫して引っかかっていた」、「竹内を読んでいく中
で、これはいかなるものか」と感じた、「何がバリアになって朝鮮について彼は言及しなかったのかということが、いま
だによくわからない」と、率直に吐露している(鶴見・加々美(2007)、206 頁)。同様に菅は、以下のように指摘して
いる。「竹内好には、中国→アジアという近代日本の他者像の設定は明確にあるが、朝鮮という問題が、そのなかでどう
いう位置を占めるのかという点は、必ずしも明確でない。」(菅(1976)、195 頁。)

⁷ 「われわれ日本人一般が、むろん私もふくめてだが、じつに朝鮮について知らない。おどろくほど無知である。朝鮮
はいちばん近い外国だから、本当はいちばんよく知っていなければならないわけだが、その朝鮮のことを相対的にはい
ちばん知らない。絶対的にも下から何番目かだろう。その知らないことが、朝鮮にとってばかりでなく日本にとっても、
どんなに不幸であるかということの実感が乏しい。」(竹内好「金達寿著『朝鮮』」(1958) 集⑤、233 頁。)

⁸ 一部の先行研究においては、竹内が朝鮮に対する視座を有していたことが確認されている。例えば尹健次は、「実際、
アジアに軸足を置いたという竹内の著作を読んでみると、そこで言われる“アジア”とは、ほとんど中国のみを意味し
ている。それが〔…〕少なくとも竹内のひとつの欠点であり、限界であるとは言える。もっとも、竹内自身、「朝鮮の知
識はほとんど皆無に近い」と述べているが、ただ、けっして朝鮮・朝鮮人をまったく無視していたわけではないことは
書き添えておく必要があるかも知れない。」と述べている(尹(2008)、214 頁)。なお、〔〕内は引用者注、以下同じ。
ただしこの場合でも、竹内のアジア認識において朝鮮がそこに含まれているということが指摘されるにとどまっている。
本研究では、竹内のアジア認識において、朝鮮がもうひとつのアジアだと認識されていたことを論証していきたい。
また、朝鮮に対する竹内の論述については、梶村秀樹と中野敏男が論じている。両者ともに竹内に対する批判と問題提
起が行っているが、竹内との対蹠的な立場ゆえに、竹内の思想を内面的に理解するという作業は十分になされていない。
この点については本研究の議論とも密接にかかわってくるため、第二章で詳述したい。

⁹ 竹内好「金達寿著『朝鮮』」(1958) 集⑤、233 頁。

¹⁰ 竹内好「朝鮮語のすすめ」(1970) 集⑤、238 頁。

¹¹ ここで、竹内の朝鮮像の変遷について一言しておこう(竹内の朝鮮論については注 5 を参照されたい)。竹内が初めて
朝鮮についての叙述を行ったのは、1932 年北京に渡る際に立ち寄った朝鮮での自身の経験を綴った、いわば朝鮮日記で
ある。次に竹内が朝鮮を論じるのは 1955 年であるが、この年の朝鮮論は、1932 年の朝鮮日記とは異なり、朝鮮に対す
る日本の侵略という契機が竹内の朝鮮論の核心に現れてくる。この変化を生み出したのは、言うまでもなく——竹内にと
つての——大東亜戦争と、主に 1948 年の「中国の近代と日本の近代」から始まった、日本の戦争および近代化に対す
る一連の批判的考察であった。そして、戦後の竹内の朝鮮像は、日本の侵略を被った被支配者という視座に貫かれてい
くことになる。この点については、本論で詳述していきたい。

I. 抵抗の主体としてのアジアと〈アジア＝朝鮮〉

本章では、竹内におけるアジアがどのようなものとして捉えられていたのかを論じる。既存の研究では、竹内におけるアジアは、〈アジア＝中国〉であったと理解されているし¹²、序で述べたように、竹内のアジア認識が基本的には〈アジア＝中国〉であることに疑いの余地はない。しかしながら、なぜ竹内が〈アジア＝中国〉という認識を有していたのか、そこにはどのような含意があったのか、なぜ竹内はアジアと中国を重ね合わせなければならなかったのかという点も確認しておかなければならない。そうしなければ、たとえ本研究が、一般的に理解される〈アジア＝中国〉だけでなく、竹内における〈アジア＝朝鮮〉という契機を見つけ出すことに成功したとしても、それは竹内の残した文献のなかから朝鮮に関する記述をいくつかピックアップしただけのものに過ぎなくなるおそれがあり、竹内の思想に内在的に迫ることはならないからである。したがって、まず竹内のアジア認識と〈アジア＝中国〉の内的な構造と内容とをみていきたい。

1. 竹内における「アジア」

はじめに、そもそも竹内はアジアをどのようなものと考えていたのか、アジアについての竹内の認識論的な理解がどのようなものであったのかを確認しておこう。竹内はアジアを、地理的あるいは本質論的に存在するものとしてではなく、ヨーロッパとの関係のうえで理解されるものだと捉えている。

ヨーロッパは、本来に非ヨーロッパ的なものをふくんでいる。ヨーロッパの成立は、非ヨーロッパ的なものの排除によって可能になるので、その過程は一回的ではなく、たえずくり返しである。その排除されたものがアジアと名づけられる。したがって、アジアとは、ヨーロッパを成立させるために排除されたものの総和、すなわち非ヨーロッパの総和といってもいい¹³。

このアジアとヨーロッパの捉え方は、アジアを規定するにはヨーロッパを規定する必要があると同時に、ヨーロッパを規定するにはアジアを規定する必要がある、ヨーロッパでないものからヨーロッパが選出されるプロセスが、アジアでないものからアジアが選出されるプロセスと重なり合っているということを意味している¹⁴。

一見トートロジーかに思われるこの論理をクリアなものにする鍵が、侵略と抵抗という対抗概念である。竹内はアジアを、ヨーロッパに対する対抗概念として捉えることで、侵

¹² 例えば、2006年に愛知大学で行われたシンポジウムの参加者の多く（溝口雄三、菅孝行、加々美光行、松本健一）が、竹内における〈アジア＝中国〉という理解を示している。この点については、鶴見・加々美（2007）を参照。

¹³ 竹内好「アジアの中の日本」（1974）集⑤、177頁。

¹⁴ 同上、176頁。

略の対象としてのアジアと、侵略に対する抵抗の主体としてのアジアというアジア像を見出す。竹内によれば、包括的な名称をもたない自足的な生活圏が破壊されることによって生まれてくる抵抗の運動が、ある程度の高まりに達してこそ、この抵抗の運動の原動力が侵略と規定される。というのも、抵抗の運動が高まらないような状況であれば、侵略は侵略だとは認識されず、竹内の言葉でいえば、「文明の普及」、「歴史の進歩」、「資本の法則の自己貫徹」、あるいは「神の摂理」といった、「法則的拡大」程度のもものと認識されるにとどまるからである¹⁵。

このような理路を辿り、竹内は、「アジア」の成立を次のように述べる。

アジアが成立するためには、アジアすなわち非ヨーロッパからヨーロッパ的なものが排除されなくてはならない。これは当然に、侵略というヨーロッパ拡大の運動に対する反動、すなわち抵抗の過程からでないとしてこない¹⁶。

「対抗概念としての侵略と抵抗」からヨーロッパとアジアの関係をみる竹内独自の視座。それに基づいて定義される、ヨーロッパによる侵略に抵抗するものとしてのアジア。これが、竹内のアジア認識の認識論的前提であった。

2. 抵抗の主体としての〈アジア＝中国〉

竹内のアジア認識が、ヨーロッパの侵略に対して抵抗するものとしてのアジアであったことを上で確認した。ここでとりわけ重要なのは、このような抵抗（とその対抗概念としての侵略）の契機に着目するという自体を、竹内が中国、より正確に言えば魯迅から学んだということである¹⁷。

竹内によれば、「私は東洋について抵抗ということを考えて」おり、「東洋における抵抗は、ヨーロッパがヨーロッパになる歴史の契機である。東洋の抵抗においてでなければヨーロッパは自己を実現しえない」¹⁸。では、抵抗とは何か。

抵抗とは何かと問われたら、魯迅においてあるようなもの、と答えるしかない。[…]
私がそれを「東洋の抵抗」という概括的な表現で考えるようになったのは、魯迅にあるようなものが、他の東洋諸国にもあるのを感じ、そこから東洋の一般的性質を導き出せるのではないかと考えたからである¹⁹。

¹⁵ 同上、177頁。

¹⁶ 同上。

¹⁷ 抵抗こそ竹内が自らの思想的格闘の末生み出した彼自身の方法であったこと、その格闘の相手こそ魯迅であったこと、そして魯迅とその方法である「掙扎」に対して抵抗することによって「掙扎」の継承を果たしたことを、研究者自身が竹内との思想的格闘を通して明らかにしたものとして、孫歌（2005）を参照。

¹⁸ 竹内好「中国の近代と日本の近代」（1948）『日本とアジア』、27頁。

¹⁹ 同上、28-29頁。

では、魯迅の抵抗とはどのようなものか。

ドレイがドレイであることを拒否し、同時に解放の幻想を拒否すること、自分がドレイであるという自覚を抱いてドレイであること、それが「人生でいちばん苦痛な」夢からさめたときの状態である。行く道がないが行かねばならぬ、むしろ、行く道がないからこそ行かねばならぬという状態である。かれは自己であることを拒否し、同時に自己以外のものであることを拒否する。それが魯迅においてある、そして魯迅そのものを成立せしめる、絶望の意味である。絶望は、道のない道に行く抵抗においてあらわれ、抵抗は絶望の行動化としてあらわれる。それは状態としてみれば絶望であり、運動としてみれば抵抗である²⁰。

「ドレイ」状態と「解放の幻想」を拒否し、自分自身がドレイであるという自覚をもったドレイであるという状態。自己がドレイであることと、自分自身がそのような自己以外のものであることを、同時に拒否すること。これこそ、竹内が魯迅から学び取った抵抗という態度であり、そのような態度によって自己を見つけ出す主体像に他ならない。そして竹内は、この抵抗に基づいた「回心文化」を、中国文化と見做す。

回心は、見かけは転向に似ているが、方向は逆である。転向が外へ向かう動きなら、回心は内へ向かう動きである。回心は自己を保持することによってあらわれ、転向は自己を放棄することからおこる。回心は抵抗に媒介され、転向は無媒介である。回心が起こる場所には転向はおこらず、転向がおこる場所には回心はおこらない。転向の法則が支配する文化と、回心の法則が支配する文化とは、構造的にちがうものだ。／私は、日本文化は型としては転向文化であり、中国文化は回心文化であるように思う²¹。

竹内における「回心」とは、自己を内部から批判し、過去を断ち切ることによって新しく生まれ出ること、古いものが甦っていくことを意味している。竹内からすれば、そのような回心は、抵抗なくしては可能ではない。抵抗することなく新しいものを受け入れ、その新しいものが必ず古くなり、古いものが新しくなることのない文化こそ日本の転向文化である。それと反対に中国の文化は、抵抗することによって古いものから新しいものが生み出されていく回心文化なのである²²。

竹内が魯迅から学び取ったように、自分自身が何者かに隷従したドレイ状態を拒否すると同時に、そのような自分が他ならぬ自分自身でしかないことを認めること。自己を洗い、洗われた自己をそのなかから再び引き出す抵抗という態度を有する主体像。そのような抵抗に基づいた回心という型をもつ中国文化。これが、竹内のみた「東洋の抵抗」である。

²⁰ 同上、41-42 頁。ちなみに竹内によれば、ここでいうような「ドレイ」とは、極言すれば魯迅自身のことである（同上、40 頁）。

²¹ 竹内好「中国の近代と日本の近代」（1948）『日本とアジア』、48 頁。

²² 同上、48-49 頁。

竹内における抵抗の主体としてのアジア像は、中国と重ね合わされていたのであった。

3. 朝鮮への視座

上述の通り、竹内における抵抗の主体としてのアジア像は、主として〈アジア＝中国〉であった。とりわけ、竹内が自身の方法ともいえる抵抗を魯迅から学び取り、それを中国文化の型へと投影していたことを考慮すれば、〈アジア＝中国〉というアジア像は、竹内思想の核心に位置するものであったといえる。

ただし、ここで本研究が強調しておきたいのが、竹内のアジア認識のなかに、朝鮮も明確に含まれていることである。もっとも、その含まれ方は、矛盾を孕んでいる。

われわれ〔日本人〕が、世界、またアジアでもいいが、その像をえがくとき、朝鮮がほとんど視野の外にあるという現状がある。いちばん近い隣国であって、関係もいちばん密接であったのに、日本人の世界地図からはいまでも欠落している。ふだん意識に上らぬくらいに無視されている。これでは正確な自己認識は不可能ではないか。もし「日本の中のアジア」に朝鮮が欠落しているとすれば、その地図は不正確であるから、当然に「アジアの中の日本」も不正確になる。〔…〕日本の統治時代にも、朝鮮人の抵抗は絶えなかった。そして一九四五年の独立になった。だから、朝鮮民族の立場では歴史が連続しているのだが、われわれの側は、そのようなものとして朝鮮を眺める能力を失ってしまった。いまでもまだその能力を回復していない²³。

竹内によれば、日本人がアジアを認識するとき、そこに朝鮮は欠落している。しかもそれは、日本の世界認識においてそこに朝鮮が含まれていないという欠落ととどまらず、日本人が自己を認識するうえで対象化すらされていないという、二重の意味での欠落である。これでは、日本人が正確に自己認識することは適わない。

この部分の竹内の思考を追うために、上述したヨーロッパとアジアについての竹内の視座を補助線としてみよう。日本と朝鮮の関係をヨーロッパとアジアの図式に沿わせて考えてみれば、非日本であるはずの朝鮮が日本において欠落してしまっており、日本は日本が排除したものをもたないがゆえに、日本の成立を果たすことはできない。ここで私たちは、「欠落」と「排除」という、類似しつつも決定的に異なる二つの言葉に直面する。竹内の思考からすれば、朝鮮を排除しているのであれば、それは朝鮮を対象化した後の作業であるため、あくまでも朝鮮の存在を認め、そのうえでその存在を斥けることになる。むしろ排除することが肯定されうるわけではないが、存在を認めていることについては肯定的に評価することができる。しかし、朝鮮が欠落しているということは、朝鮮の存在を認めて

²³ 竹内好「アジアの中の日本」(1974)集⑤、173-174頁。

いないことになる。むしろ、認めていないどころか、朝鮮を対象化することができておらず、日本からみて朝鮮は存在していないことになってしまう。

では、このような日本と朝鮮は、竹内においてどのような関係にあるのか。彼は1955年の「東洋人の日本観」において、——インドを詩人タゴールへと収斂させ——インドと中国は「被圧迫民族の連帯感」によって結ばれ、共鳴を伴って心情的に影響を与え合う関係にあると見做し、日本に対するインドと中国を、インドは「旅行者」であり、中国は「しばしの滞在客」として、どちらも一時的に日本を訪れる者という比喻を用いて表現している。それに対して、朝鮮は、「壁ひとえ隣のおなじ長屋の住人」と表されている。「壁ひとえ隣のおなじ長屋の住人」として生活の近さの度合いが近く、その愛憎はきわまり、朝鮮からみた日本には、「日本「観」に必要な距離が失われている」のである²⁴。

竹内は朝鮮を、「壁ひとえ隣のおなじ長屋の住人」として、中国（やインド）以上に近く、日本と接し、引き剥がせば長屋が長屋でなくなる、すなわち日本が日本でなくなる存在として言い表した。竹内におけるアジア認識が〈アジア＝中国〉を中心とされたものだとしても、それとは異なるもうひとつのアジアとしての〈アジア＝朝鮮〉というアジア認識を、竹内は確実に有していたのである²⁵。

本章での考察を通して、竹内におけるアジアの意味とは、抵抗の主体としてのアジアであったことが明らかになった。また、竹内におけるアジアが基本的には〈アジア＝中国〉だったことはたしかであった。しかし、中国とともに、それとは異なるアジアとして朝鮮が並べられていた。このもうひとつのアジアである〈アジア＝朝鮮〉は、〈アジア＝中国〉とは異なり、まさに日本の半身としてのアジアだと見做されていた。この半身としてのアジアであるはずの〈アジア＝朝鮮〉を、日本人が忘却してしまっていること、これを竹内は問題視する。半身であるがゆえに、それを対象化することなく、排除するという形でその存在を認めることさえなく、朝鮮を忘れ去っている日本。竹内のアジア認識における〈アジア＝朝鮮〉は、朝鮮を知らない自分自身に対する否定と反省も相まって、〈アジア＝中国〉に対するもうひとつのアジアとして織りなされていったのであった。

II. 朝鮮像を生み出す竹内の方法と問題意識

前章で、竹内における朝鮮認識が、彼自身の思想の内的構造において、その核心のいわば裏側に位置するものであったことが明らかとなった。本章では、朝鮮をめぐる竹内の言説について言及している数少ない先行研究として、竹内のアジア論とそこでの朝鮮への視座を批判した梶村秀樹と中野敏男の議論を取り上げる。なぜなら、竹内がたしかに朝鮮を

²⁴ 竹内好「東洋人の日本観」（1955）『日本とアジア』、81-82頁。

²⁵ ここでの「壁ひとえ隣のおなじ長屋の住人」という比喻に込められた意味あいについては、第三章で詳述したい。

みていたということを主張しえたとしても、その朝鮮への視座が彼自身のどのような方法と問題意識によって生み出されたものであるかを考察する必要がある、その考察に梶村と中野の竹内批判が寄与しうるからである。ちなみに、中野の竹内批判は、梶村の竹内批判を引き継ぎ、竹内の言説における方法論的な問題点を指摘しているものであるため、まず梶村の竹内批判を、次いで中野の竹内批判という順序で、それぞれ確認していきたい。

1. 梶村と中野の竹内批判

梶村の竹内批判は、「アジア主義」をめぐる 1963 年の竹内の議論に向けられる²⁶。一般に右翼の源流だといわれる玄洋社をアジア主義者と見做し、そのなかにアジア連帯をめざす契機を見つけ出そうとする竹内に対して梶村は、その試みの妥当性に主として朝鮮の立場から問いを投げかけるとともに、竹内の記述における不正確さ、多くの事実の混同、不当な単純化を指摘する。さらに、より決定的な問題として梶村は、侵略主義的なイデオロギーから思想を分離させようとする竹内の方法の妥当性を批判する。上記のような不当な問題意識と事実誤認、そして恣意的な方法によって竹内は、明治のアジア主義者の意図を連帯であったと見做す。しかし梶村からすればそれは、まぎれもなく侵略だった。そして梶村は、「アジア主義のような手あかにまみれたことばを何回も洗い直して利用しようとするより、それを否定のバネにすることを「民衆」に呼びかけた方がましではないかと思う」として、竹内を批判している²⁷。

朝鮮（史）や日朝関係（史）に関する研究を進めると同時に、実際に日本と韓国との連帯運動にもコミットし²⁸、「隣国〔朝鮮〕の人びとから信頼され愛された²⁹」梶村からすれば、朝鮮についての竹内の「事実誤認」や、条件つきとはいえ朝鮮に対する侵略を連帯だと読み替えようとする竹内の態度に、学問的かつ超学問的に反発するのは無理からぬことであっただろう。しかし本研究の立場からすれば、竹内の「アジア主義」論が、梶谷のいうところの「事実誤認」や「侵略→連帯」の読み替えによるものであったとしても、その事実誤認や読み替えが、竹内においてなぜ生じたのかという問題を考えなければならない。

また、中野も梶村と同様に、竹内のアジア論に対して批判を行う。ただし中野は、梶村の竹内批判を参照しつつも、朝鮮に内在的な梶村とはやや異なり、より認識論的な問題点を竹内にみている。中野は、竹内の「方法としてのアジア」という立場が、「日本の「伝統」とアジアの「原理」とに可能性を求める投企」であり、「たとえわずかでもそこにあるはずのアジアの「原理」に結びつこうとする思想」、「その方向に人々を動かすエネルギーをも

²⁶ 日本の近代史から、アジア主義と呼ぶ以外に呼びようのない心的ムードとそれに基づいて構築された思想を見つけ出し、そこからアジア連帯（の意識）を見つけ出そうとした竹内の議論（竹内好「日本のアジア主義」（1963年）『日本とアジア』、287-354頁）。

²⁷ 梶村（1964）、97-103頁。

²⁸ 尹（2008）、261頁。

²⁹ 金広志（1992）、1頁。

った思想」を意識的に引き出そうとするが、それと引き替えに竹内が、大切にすべき元々の思想の根幹をこぼれ落としてしまうことで重大な陥穽に落ち込んではいないか、という問題を提起している。そして、日本の侵略性を問う竹内の議論には、その議論の構造において朝鮮の植民地化問題が欠落していると、中野は竹内を批判する。現実のアジア主義者を救い出すという自身の課題を果たすために竹内は、「初期ナショナリズムと膨張主義の結びつきを「不可避」と是認」し、「朝鮮の植民地化という文脈において「誤ったイメージ」を作ったそこに出て行った侵略主義的なアジア主義者たちを現実に救済してしまっている」。それによって竹内は、「方法としてのアジア」というリスクな賭けに躓き、その陥穽に落ち込んでいる」と言わざるを得ない³⁰。これが中野の竹内批判である。

竹内の「方法としてのアジア」の陥穽を指弾する中野の批判は、考慮されるに値するものである。しかしながら、梶村が踏んだ竹内批判の蹉跌を、中野自身もまた踏襲しているように思われる。つまり彼らは、竹内の問題意識を内在的に理解していないのである。たしかに中野は、竹内が日本に独自のものとして思想的エネルギーを生み出す「伝統」や「原理」を、普遍的な価値を求める道筋のステップとして構成的に創出しつつそれに依拠するために、竹内の「方法としてのアジア」という立場が生まれたとして³¹、竹内の「方法としてのアジア」の認識論的な問題点を指摘するよりも前に、なぜ竹内が「方法としてのアジア」という立場に立つ必要があったのかという点にまで、考察を及ぼしている。そして中野は、この立場ゆえに竹内が、アジアの「原理」を追求する思想を意識的に導出しようとしたと指摘している³²。これは一見すると、竹内の論理を認めたくえでその論理ゆえの問題点を指摘しているかのようにみえる。しかしながら、なぜ竹内は、「伝統」という日本の内側から普遍的な価値を構成的に創出しなければならなかったのだろうか。竹内があくまでも日本と日本の伝統に固執した理由を、中野の竹内理解から読み取ることはできない。そしてこの問いのなかに、私たちの問題が隠されている。

2. 竹内なりの朝鮮像の理由——抵抗という方法

どのような問題意識ゆえに竹内は、梶村や中野が批判したような形で朝鮮を捉えたのだろうか。その答えは、抵抗という竹内自身の方法にある。第一章第一節でみたように竹内は、自己を内側から批判し、過去を断ち切ることによって新しく生まれ、古いものが甦っていく文化の型を「回心」と呼んでいる。明示こそされていないが、日本人による主体的なアジア連帯の模索を追究する竹内の作業の核には、この「回心」があるように思われる。竹内は、——梶村の批判した——「日本のアジア主義」（1963年）とほぼ同時期に執筆した

³⁰ 中野（2006a）、212-214頁。

³¹ 同上、211頁。

³² 同上、212-214頁。

「日本人のアジア観」（1964年）で次のように述べている。

当時〔大東亜戦争の時期〕、アジアは深く日本人の心のうちにあった。そのアジア認識がじつは誤っていることを敗戦によって教えられるわけだが、誤ったにせよ、ともかく主体的に考える姿勢はあった。そしてこの姿勢は、明治以後の近代化の歴史のなかでつちかわれたものだった。〔…〕失ったのは、明治以来つちかっていたアジアを主体的に考える姿勢である。アジアの一員として、アジアに責任を負う姿勢である³³。

日本のなかであり、そして失われていったアジアを主体的に考える姿勢、アジアの一員として、アジアに責任を負う姿勢。アジアに対する侵略を進め、戦後その侵略を全否定することでアジアとの連帯を失っていった日本に対する抵抗を通して竹内は、歴史のなかからアジアとの連帯をめざす姿勢を見つけ出そうとする。

〔大東亜戦争での朝鮮や中国に対する〕侵略はよくないことだが、しかし侵略には、連帯感のゆがめられた表現という側面もある。無関心で他人まかせでいるよりは、ある意味では健全でさえある。〔…〕大東亜戦争の侵略的側面はどんなに強弁しても否定できぬと思う。ただ、侵略を憎むあまり、侵略という形を通じてあらわされているアジア連帯感までを否定するのは、湯といっしょに赤ん坊まで流してしまわないかをおそれる³⁴。

侵略は一面ではゆがめられた連帯感でもあり、それはある意味ではアジアとの主体的な連帯でさえある。抵抗という竹内の方法からすれば、まさに梶村のいう「アジア主義のような手あかにまみれたことば」を、梶村のように「否定のバネ」としてではなく、日本の内側に存在したアジアとの連帯の模索を侵略のなかに認めること、それによってアジアとの連帯を失った侵略を批判する出発点に立つことこそが重要となる。「アジア主義」からアジア連帯を抉り出していかなければならないという「必然性」が、竹内にはあった。私たちはここに、連帯感の結果が侵略であったことを厳然と認めつつも、そこにアジア連帯の可能性があったことを積極的に捉えていこうとする、竹内のぎりぎりの問題意識とアジアへの責任意識を見出すことができる。このような問題意識と責任意識をもつ竹内からすれば、中野のいうような普遍的な価値を創出するプロセスは、抵抗を経たものでなければならなかった。そうでなければ、日本の近代のように、ただ新しい「普遍的な価値なるもの」への追従に終わってしまうから。だからこそ、一見したところみるべき伝統のない日本のなかから、「伝統」を抉り出さなければならない。手あかにまみれた「アジア主義」という言葉だからこそ、それを血で洗いながら、その血で洗われた「アジア主義」から普遍的な価値を見つけていこうとする思想的な態度。この態度こそ、抵抗という竹内の方法によるものなのである。

³³ 竹内好「日本人のアジア観」（1964）『日本とアジア』、95頁。

³⁴ 同上、95-96頁。

梶村の批判によって指摘された竹内の「アジア主義」論も、中野の批判によって指摘された竹内の「方法としてのアジア」の陥穽も、抵抗という竹内自身の方法と、歴史のなかからアジア連帯への志向を見つけ出すという彼の問題意識によって生み出されざるをえなかったものであった。このような竹内の方法と問題意識に基づいて認識されるに到った朝鮮の姿がどのようなものであったのか、そしてその朝鮮の姿にはどのような意味が込められていたのかという問題を、次に論じていきたい。

Ⅲ. 朝鮮をめぐるジレンマ

ここまでの議論を通して私たちは、竹内における〈アジア＝朝鮮〉認識の問題、さらには、竹内がどのような朝鮮像を有しており、そこにどのような意味が込められていたのか、そしてなぜ竹内が朝鮮を知り、学ばなければならないと考えたのかという問題の核心に近づいてきた。これらの問題を本章で考察していこう。

1. 被支配者としての朝鮮

まず、竹内の朝鮮像がどのようなものであったのかを明確にしておく必要がある。それが端的に示されているのが、以下の叙述である。

被支配者は支配者のことは細部までわかるが、支配者は被支配者のありのままの姿を見ることはできない。これは階級と民族とを問わず、あらゆる人倫関係を貫く法則であり、かつ偏見と差別の発生源である。したがってわれわれ日本人は、韓国人が日本を見るのとちがって、みずから積極的に努力することなくして韓国人の生活感情と思想とを窺うことはできぬ歴史的宿命を負っており、残念なことにその宿命は、今日なお十分には自覚されていない。このままでは隣国との対等の友好を打ち樹てることがはなはだ困難である³⁵。

ここでは、日本と朝鮮の関係が、支配者と被支配者の関係だと見做されている³⁶。その支配—被支配の関係によって生み出された偏見と差別によって、支配者である日本人が自身の積極的努力なしに、被支配者である朝鮮人の生活感情と思想を理解することはできない。しかも、理解することができないだけでなく、理解するという行いの必要性自体が自覚さ

³⁵ 竹内好「時勢の要求を満たすもの」(1973)集⑤、243-244頁。

³⁶ いわゆるポスト・コロニアルの立場からみた場合、ここでの竹内の議論が二分法的な支配—被支配論となっていることは否めない。例えばエドワード・W・サイードのように、支配—被支配という二分法を乗り越え、相互が絡み合う経験として帝国主義的な支配をみるという視点も必要ではあるだろう(このようなサイードの主張については、Saïd (1993)を参照)。ただし、本論で後にみるような形で支配者と被支配者の関係を問うていく竹内の議論を鑑みれば、ここでの竹内の支配—被支配論も、考察に値するものだと思われる。

れていないのである。そして、被支配者としての朝鮮に対する支配者としての日本の侵略の事実を、竹内は次のように認める。

朝鮮の国家を滅ぼし、中国の主権を侵す乱暴はあったが、ともかく日本は、過去七十年間アジアとともに生きてきた。そこには朝鮮や中国との関連なしには生きられないという自覚が働いていた³⁷。

前章で確認したように、竹内は、朝鮮と中国に対する日本の侵略を認めたとはいえ、そこにあった朝鮮と中国とともにでなければ生きることができないというアジア連帯の自覚を、「アジア主義」から抉り出そうとしていた。では、こういった竹内の試みは、日本と朝鮮の支配—被支配の関係についての論述においてどのように果たされていったのだろうか。この問題を、本研究の関心に沿って、中国に対するもうひとつのアジアとしての朝鮮という視座からみていこう。日本に支配される被支配者としての朝鮮像をもちつつ竹内は、現実には侵略のイデオロギーに堕した「アジア主義」からアジア連帯の理念を引き剥がすべく、朝鮮を理解し、朝鮮と連帯することは、アジアとの連帯につながっていくと主張した。竹内は、唾棄すべき侵略の歴史を決然と認め、それを悔やみながら、アジアに対する主体的な関係を結んでいこうとする自覚を、「アジア主義」の歴史から抉り出そうとしていたのである。

では竹内は、支配者である日本の侵略が被支配者である朝鮮に何をもたらしたと考えていたのだろうか。実際の政治状況として、朝鮮半島南北の分断にかつての支配者であった日本の責任があるという現実政治的な認識を、竹内が有していたことはたしかである³⁸。しかし本研究では、被支配者としての朝鮮人の生に目をとめ、それを理解しようと努めた竹内の姿に焦点を当てたい。なぜなら、「ある国の人々のものの考え方とか感じ方、さらにそれを通してもっと深いところにある生活そのもの、それを研究対象とする」もの、「心の面から生活を眺める」ものこそ「文学」であり、そのような文学を志した文学者であった竹内は日本の侵略を受けた朝鮮の人々の生をどのように捉えたのかを論じることが、竹内を内在的に理解することを可能にすると考えられるからである³⁹。

本研究の観点からもう一点付け加えると、竹内は中国と朝鮮に対する日本の侵略の事実を認めてはいるものの、第一章でも述べたように、彼において日本にとっての中国と朝鮮の意味あいとは微妙に異なっている。というのも、竹内が言い表したところによれば、中国

³⁷ 竹内好「日本人のアジア観」(1964)『日本とアジア』、95頁。

³⁸ 「朴政権の成立の前には、日本にいる朝鮮人の中でも南北の和平統一の話あいがさかんだった。容共と反共とイデオロギイの相反する人たちが、口角アワをとばして互いに相手の政策を非難しながら、しかし統一という共通目的のために一致点を見出そうと努力している様は、見ても感動的だった。これこそ朝鮮民衆の最大の願望であって、抑圧さへのぞかれればかならず再現するにちがいないものである。日本は、統一を積極的に援助する力はないかもしれない。しかし、統一運動のジャマだけはしてはならない。これは元統治者としての償いであり、責任である。せめてジャマはするな、と朝鮮の声なき声が日本人に呼びかけているではないか。大びらに統一を妨げる今の日韓交渉を推進している人の耳には、この声がかきこえぬのだろうか。」(竹内好「日韓交渉私感」(1962)集⑨、354-355頁。)

³⁹ 竹内の文学観については、竹内好「方法としてのアジア」『日本とアジア』、443頁。

は「しばしの滞在客」であるのに対して、朝鮮は「壁ひとえ隣のおなじ長屋の住人」だったからである。一時的に日本を訪れるものに喩えられる中国に対して、いわば日本の半身とすら喩えられる朝鮮に対するこの比喩には、どのような意味が込められていたのだろうか。これらの問題を、次節で論じていきたい。

2. 被支配者としての朝鮮のジレンマ

既にみたように、竹内によれば、理想的にはアジア連帯のパートナーであるはずの朝鮮を現実として被支配者に貶めたのは、あくまでも日本であった。若き日の竹内自身が賭けた「東亜解放の戦⁴⁰」としての大東亜戦争における、日本の侵略であった。朝鮮を知らなければならぬと繰り返す竹内は、「すべての言語表現は自分の血肉とともにあり、その責任は一生つきまとう」、「他人にどう断罪されようとも、私はあの思想〔大東亜の理想〕をもったまま地獄へ行くほかない」という決意を語りつつ⁴¹、アジア連帯の理念を掲げていた。

では竹内は、このように日本の侵略の事実を認めながら、それが侵略を被った朝鮮の人々の生に何をもたらしたと考えていたのだろうか。日本に対する最も深い愛憎をもつアジアである朝鮮、そこで生きる朝鮮人が日本の侵略によって受けたもの。それは、ある苦しみであったと竹内は解く。それを象徴するものとして、竹内はひとりの朝鮮人女性の詩を引き、次のように述べる。

『恩讐三十年』に「韓国の母」という文章があって、一人の朝鮮婦人が、戦乱を悲しんでよんだ短歌数十首の連作が紹介されている。／心をし 祖国ことばもて あらわせぬ われを ゆるせよ 過渡期に生れば／流れ来て 南の果てに落葉かく おきな おうなに なりはてしかも／若き日を 生み育くみつ老い来しを 女は哀し 子らみな征きぬ／一人の婦人が、生まれてはじめて感情の高ぶりから詩をつくったとき、その詩が母国語であらわせなかったということは、じつに悲惨である。しかし、その詩がわれわれから見ることごとく絶唱であるのは、なんというおそろしいことだろう。これほど痛烈な日本批判はあるまい。われわれ日本人は心してこの異邦人の日本語による歌をきくべきである⁴²。

ここで竹内は、この朝鮮人女性の声なき声に耳を傾けよとっているのではない。そうではなく、彼女は自らの声で、自らの苦しみを語っている。それどころか彼女は、詩という高度な表現様式でもって自らの苦しみを語っているのである。「一人の婦人が、生まれてはじめて感情の高ぶりから詩をつくったとき、その詩が母国語であらわせなかったという

⁴⁰ 竹内好「対東亜戦争と吾等の決意（宣言）」（1942）集⑩、297頁。

⁴¹ 竹内好「謎」（1972）集⑪、157頁。

⁴² 竹内好「東洋人の日本観」（1955）『日本とアジア』、82頁。原文は金素雲（1954）、69-81頁、金素雲（1981）、12-22頁にも収録されている。

ことは、じつに悲惨である」と述べる竹内は、本来は母語であるはずの朝鮮語ではなく、自分たちを支配する言語である日本語で自らの苦しみを言い表さざるをえない朝鮮人の苦しみを感じ取っていた。植民地支配によって生じた苦しみの表象を、その苦しみを強い、自身を支配する侵略者の表象ツールを用いることで実現せざるをえないという二重の苦しみ。このジレンマのなかで生きざるをえない朝鮮人の悲惨さ。大東亜戦争の二重構造の一極である⁴³、アジアに対する侵略戦争とその結果として生み出された朝鮮人の悲惨さを、竹内は看取していたのである。

さらに、被支配者としての朝鮮のジレンマを竹内が見て取りつつ、そのような朝鮮人の悲劇を見出すことだけに立ち止まっていない点が重要である。上の引用において竹内は、植民地支配によって朝鮮人の苦しみを生み出した日本人に、この悲劇がどのように受け取られ、何を訴えかけるのかを語る。竹内によれば、二重の苦しみに苛まれながら詠まれたこの詩は、日本人にとってみれば「ことごとく絶唱」なのである⁴⁴。ここで竹内は、「ことごとく絶唱」であるこの詩が、どのような意味で「われわれ」にとって「おそろしい」のかを説明してはいない。ただし、この詩が「一人の朝鮮婦人」の心情が吐露された魂の叫びである一方、それを日本語で詠われた日本語の詩として読むことができることこそ、この詩を絶唱であると見做す日本人の無知と残酷さだと、竹内が告発しているのではないだろうか⁴⁵。というのも、竹内の論理を敷衍してみると、この朝鮮人女性の詠った詩がハンブルで書かれた朝鮮語の詩であったのなら、その詩は日本人にとって「絶唱」とはなりえない。多くの日本人が理解し、その優劣を判断できる詩は基本的には日本語で書かれたものに限られるために、朝鮮語で書かれた詩が感情の昂ぶりの吐露であるのか、あるいはその詩が何を表現しようとしているのかを、日本人が理解することも、判断することもできないからである。この朝鮮人女性の詩を詩という表現様式のみ限定して評価することは、朝鮮に対する日本の支配・侵略から目を背けることであり、日本人の意識から朝鮮が欠落していることを意味している。これが、竹内の剔抉した「ことごとく絶唱」であることのおそろしさであろう。

日本の支配と侵略があつたがゆえに、ある朝鮮人がその人自身の苦しみの表象を、その苦しみを生み出す侵略者としての日本の言語である日本語を用いて果たさざるをえず、そうした葛藤を抱えながら詠われた日本語の詩が、朝鮮語を知らない大多数の日本人にとつ

⁴³ 「大東亜戦争は、植民地侵略戦争であると同時に、対帝国主義の戦争でもあつた。この二つの側面は、事実上一体化されていたが、論理上は区別されなければならない。」(竹内好「近代の超克」(1959)『日本とアジア』、192頁。)

⁴⁴ 竹内はこの「絶唱」という言葉にどのような意味を込めているのかを詳らかにしていないが、辞書によればそれは、①極めてすぐれた詩や歌、②声をかぎりに感情をこめて歌うこと、という二つの意味を有する言葉とされている。なお、強調は引用者。

⁴⁵ 「日本国家は朝鮮人から一度は完全にその母国語を奪った。その理不尽さを、感覚的に理解することは、どんなに努力しても日本人には不可能ではないかと私は思う。いくら朝鮮語を習ったって、そんなことがわかるわけではない。けれども、その手前のところで、朝鮮語を抹殺することによって日本語そのものがゆがめられ、墮落した事情を確認し、墮落の程度を測定することはできるはずだ。そのために朝鮮語は必要不可欠なのである。」(竹内好「朝鮮語のすすめ」(1970)集⑤、236頁。)

での母語である日本語であるからこそ、その内容に対する理解や判断、場合によっては共感までもが可能になるというパラドックス。ここには逆説的にも、日本が朝鮮を知らず、知らないからこそ意識のなかからその存在を欠落させている朝鮮の姿が現れている。日本の半身であるからこそその存在が対象化・意識化されていないことを剔抉し、朝鮮を朝鮮として対象化・意識化すること、そうすることによって日本の自己認識を問い直し、その実現の方向性を示すこと。これが、「これほど痛烈な日本批判」はなく、「われわれ日本人は心してこの異邦人の日本語による歌をきくべき」という竹内の語り、そして竹内の朝鮮像に込められた意味なのである。

本研究の観点からみて、竹内における〈アジア＝中国〉と〈アジア＝朝鮮〉を比較しておく必要もある。第一章で論じたように、竹内からすれば、〈アジア＝中国〉は、ヨーロッパの侵略に対する抵抗の主体であった。では、〈アジア＝朝鮮〉はそのような抵抗の主体と同じものだったのか、あるいは異なるものだったのか。竹内によれば、日韓併合後の日本の統治時代、日本に対する朝鮮の抵抗は絶えなかった⁴⁶。これと同様に、日本の中国に対する侵略とそれに対する中国の抵抗も当然あった⁴⁷。このように、中国と朝鮮は、日本による侵略とそれに対する抵抗をともに経験していた。しかしここで、抵抗の主体の範型を魯迅にみた竹内において、中国型の抵抗の主体像がヨーロッパの侵略に対するアジア一般の抵抗の主体のモデルへと昇華された一方で、朝鮮は抵抗の主体として明確には対象化されるに到らず、アジアのなかで最も特殊な形で日本の侵略を受けた存在だと見做された。すなわち、〈アジア＝中国〉に対して〈アジア＝朝鮮〉が有する特徴は、日本語という侵略者の言語で自らの苦しみを語らざるをえないことにあったのである⁴⁸。竹内は、自身の朝鮮像のなかに、抵抗の主体像を確固たるものとして見出すことはなかった。しかしその朝鮮像には、日本の侵略を受け、侵略者の言葉で自らの苦しみを語りながら、日本の侵略とそれが生み出す苦しみを日本に対して突きつける朝鮮人の姿が映し出されていた。朝鮮を知り、学ぶことで、日本を知り、学ぶこと。日本が何から目を背け、それによってどのような苦しみを生み出し、それを強いてきたのかを知り、学ぶこと。竹内における朝鮮像にあったのは、その存在を通して日本に自己認識を求める、もうひとつのアジアの姿なのであった。

結

本研究冒頭で述べたように、竹内好のアジア認識が、主に中国を念頭に置いていたものであったことに疑いの余地はない。しかし竹内は、中国と重ね合わされたアジアには還元

⁴⁶ 竹内好「アジアの中の日本」(1974)集⑤、174頁。

⁴⁷ 日本による中国への侵略とそれに対する中国の抵抗が明記されているものとしては、竹内好「中国のレジスタンス—中国人の抗戦意識と日本人の道徳意識」(1949)集④、27頁や「林語堂『嵐のなかの木の葉』解説」(1951)集③、183頁、「抗日運動」(1954)集④、259頁、「日本・中国・革命」(1967)集④、317頁などがある。

⁴⁸ 『竹内好全集』を見渡してみても、中国や他のアジア諸国についての竹内の言及にこのような視点はほぼみられない。

し切ることのできないアジアの姿を、朝鮮に見出していた。そこにあったのは、被侵略者としての苦しみを、侵略者の言語を用いて表象せざるをえないという矛盾であった。そして、そのような侵略者が与えた被侵略者の苦しみが、侵略者の言語によって表象されているからこそ侵略者に認識されうるという逆説。日本の侵略を被った朝鮮と朝鮮を侵略した日本とが経験した矛盾と逆説に、竹内は気づいていた。

しかし竹内は、このような朝鮮と日本の経験に気づいてはいたものの、朝鮮において抵抗の主体が創出される契機を確固たるものとして見つけ出すことはなかった。「対抗概念としての侵略と抵抗」という竹内の視座からみれば、それをヨーロッパとアジアだけでなく、日本の侵略とそれに対する朝鮮の抵抗という論点にまで、より積極的に敷衍するべきではなかったか。戦後日本において「健全なナショナリズム」のひとつの型として抵抗の主体像を構想し、まずその創出と定着を目指した竹内に対してはやや酷な批判ではあるが、朝鮮を抵抗の主体のひとつとして十分に対象化するにまで到らなかったことが、竹内の限界だと指摘することはできる。

この点に関していえば、竹内の思想の核心部分には抵抗の主体の追求があったと考えられるが、自己が他者における抵抗の主体の創出を妨げる要因となるおそれについての思考や警戒、問題意識は希薄であるという批判も必要であろう。本研究の議論に即してみた場合、抵抗の主体としての新たな自己を創出しようとしても、その過程に、むしろその端緒においてさえ侵略者側の言語という表象ツールを用いざるをえない残酷なアポリアを読み取る態度が必要なのではないか、ということである。日本と朝鮮という文脈からいえば、朝鮮を侵略し、朝鮮の母国語を抑圧し、朝鮮における抵抗の主体の創出を妨げるような要因となっていたのが他でもない日本であったということを剔抉し、それを思考の過程に載せるという問題意識は、竹内の射程の内にはなかった。

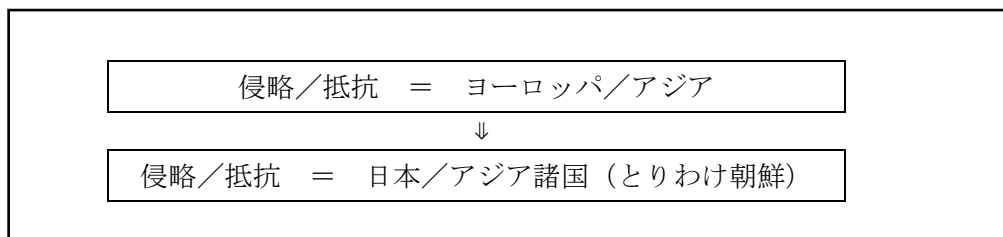
したがって、このような竹内の限界や射程を見定めつつ、竹内の思想を学ぶことのできる私たちがそこから批判的に継承しうるのは、抵抗の主体の形成に胚胎されているアポリアを克服した形で抵抗の主体像を構想すること、言い換えれば、抵抗の主体を創出する可能性を奪うような支配を剔抉し、それを批判し超克していくような知的な態度であろう。本研究で取り上げた竹内の議論に即していえば、朝鮮人女性の深く美しい静かな叫びのなかに、そのあまりにも悲しい抵抗、あまりにも残酷な抵抗の萌芽を認めること。その叫びを生み出す苦しみを朝鮮人女性に強い、彼女の抵抗の萌芽を押し流そうとする日本の支配や侵略のあり方を問題視すること。そうすることによって、日本のなかに対象化・意識化されていなかった朝鮮を対象化・意識化していくこと。それによって、日本の自己認識をより正確なものにしようとする。こういった態度を、私たちは竹内の思想から引き継いでいくことができる。竹内が問題としたことを、竹内の方法と論理を用いて、竹内が論じ切ることのなかった問いにまで進めていくことが、竹内の思想の批判的継承となりうるように思われる。

さらに、このような批判的継承を敷衍して、日本とアジアという文脈に即していえば、「対抗概念としての侵略と抵抗」という竹内の視座を、ヨーロッパとアジアの関係に適用するだけでなく、日本と他のアジア諸国、そのなかで最も特殊な形で日本と関わりをもつ朝鮮との関係に適用することも有益であろう（図①）。そうした場合、私たちはアジアにおける抵抗の主体の二つのモデルを竹内から継承することができる。つまり、一方に、〈アジア＝中国〉型の抵抗の主体、すなわちヨーロッパに対する抵抗の主体であるアジア一般のモデルとしての中国。そして他方に、〈アジア＝朝鮮〉型のもうひとつの抵抗の主体、すなわち日本の侵略に対する抵抗の特殊モデルとしての朝鮮。このような朝鮮像を提示することによって、竹内が果たすことのなかった、日本によって侵略された側の抵抗の契機を奪おうとする日本の支配のあり方を抉り出し、それを克服していこうとする思想的な営みも、私たちが竹内から批判的に継承しうるものだといえる（図②）。

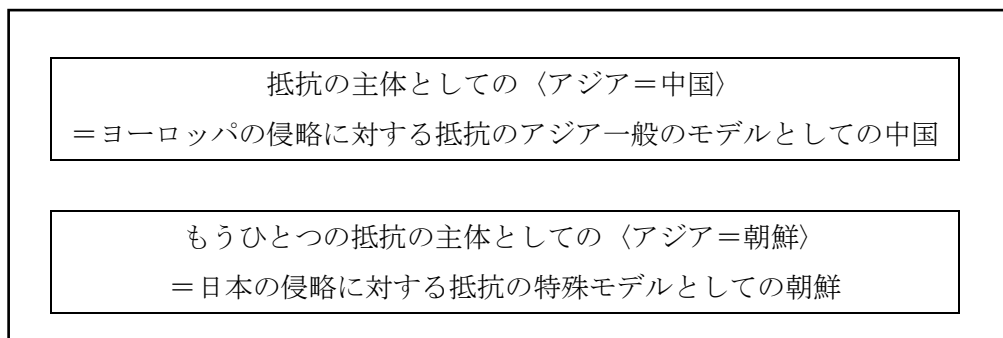
ここにも、もうひとつのアジアがある。

イメージ図

①竹内から批判的に継承しうる、抵抗の主体としてのアジアのイメージⅠ



②竹内から批判的に継承しうる、抵抗の主体としてのアジアのイメージⅡ



<参考文献>

『竹内好全集』については、「集」と表し、巻数を○に囲んで表記する。

竹内好の著作

『竹内好全集』（筑摩書房、1980-1982年）。

『日本とアジア』（筑摩書房、1993年）。

『魯迅』（講談社、2006年）。

竹内の著作の外国語訳

Takeuchi Yoshimi (Herausgegeben und übersetzt von Seifert, Wolfgang und Uhl, Christian) (2005),
Japan in Asien. Geschichtsdenken und Kulturkritik nach 1945, München: IUDICIUM Verlag.

竹内研究に関するもの

尹健次（2008年）『思想体験の交錯——日本・韓国・在日 1945年以後』岩波書店。

鶴飼哲（2003年）「「影を負う」こと、あるいは抵抗の翻訳——竹内好『魯迅』『応答する力』青土社、280-294頁。

鶴飼哲（2003年）「歴史を書き換えるということ——竹内好「中国の近代と日本の近代」『応答する力』青土社、295-302頁。

大澤真幸（2012年）「掙扎の無思想——竹内好のナショナリズム」『近代日本思想の肖像』講談社、94-107頁。

小熊英二（2002年）『〈民主〉と〈愛国〉』新曜社。

梶谷懐（2015年）『日本と中国、「脱近代」の誘惑』太田出版。

梶村秀樹（1964年）「竹内好氏の「アジア主義の展望」の一解釈」梶村秀樹著作集刊行委員会・編集委員会（1992年）『梶村秀樹著作集第1巻——朝鮮史と日本人』明石書店、97-103頁。

梶村秀樹（2014年）『排外主義克服のための朝鮮史』平凡社。

カリチマン、リチャード（2001年）「竹内好における抵抗の問題」『現代思想』青土社、2001年7月号、8-15頁。

金広志（1992年）「梶村さんを偲んで」『梶村秀樹著作集第1巻』付録No. 1、1-2頁。

金素雲（1954年）『恩讐三十年』文信社。

金素雲（1981年）『こころの壁』サイマル出版会。

佐藤美奈子（2006年）「「アジア」を語るということ——1980年代以降の竹内好論」『社会科学研究』第58巻第1号、47-68頁。

代田智明（2009年）「竹内好『近代とは何か』『近代の超克』再読」『中国研究月報』一般社団法人中国研究所、2009年7月号、1-12頁。

菅孝行（1976年）『竹内好論——亜細亜への反歌』三一書房。

Said, Edward W. (1993), *Culture and Imperialism*, New York: Alfred A. Knopf (エドワード・W・

- サイド（大橋洋一訳）（1998, 2001年）『文化と帝国主義 1・2』みすず書房）。
- 杉谷幸太（2011年）「〈書評〉丸川哲史著・河出書房新社『竹内好——アジアとの出会い』中国研究月報第65巻第1号、49-53頁。
- 孫歌（2002年）『アジアを語ることのジレンマ——知の共同空間を求めて』岩波書店。
- 孫歌（2005年）『竹内好という問い』岩波書店。
- 田澤晴子（2015年）「竹内好——「変革のための学問」をめざして」大井赤亥・大園誠・神子島健・和田悠編『戦後思想の再審判：丸山眞男から柄谷行人まで』法律文化社、70-85頁。
- 陳光興（丸川哲史訳）（2011年）「補論 竹内好一九六〇年「方法としてのアジア」を読む——目下の知識構造の省察として」『脱帝国——方法としてのアジア』以文社、223-237頁。
- 陳光興（山脇千賀子訳）（2012年）「方法としてのアジアと文化研究：竹内好の1960年講義「方法としてのアジア」について」『インターカルチュラル：日本国際文化学会年報』10号、51-61頁。
- 鶴見俊輔・加々美光行（2007年）『無根のナショナリズムを超えて——竹内好を再考する』日本評論社。
- 中川幾郎（1985年）『竹内好の文学と思想』オリジン出版センター。
- 中島岳志（2014年）『アジア主義——その先の近代へ』潮出版社。
- 中野敏男（2006年 a）「「方法としてのアジア」という陥穽——アジア主義をめぐる竹内好と梶村秀樹の交錯」『前夜』2006年夏、影書房、208-214頁。
- 中野敏男（2006年 b）「植民地主義批判と朝鮮というトポス——アジア主義をめぐる竹内好と梶村秀樹の交錯 その2」『前夜』2006年秋、影書房、215-223頁。
- 萩原稔（2015年）「竹内好の「アジア」「中国」「日本」『戦後日本思想と知識人の役割』法律文化社、56-79頁。
- 松本三之介（1986年）「戦後思想と竹内好」『世界』岩波書店、486号、225-237頁。
- 松本健一（2000年）『竹内好「日本のアジア主義」精読』岩波書店。
- 松本健一（2005年）『竹内好論』岩波書店。
- 丸川哲史（2010年）『竹内好——アジアとの出会い』河出書房出版社。